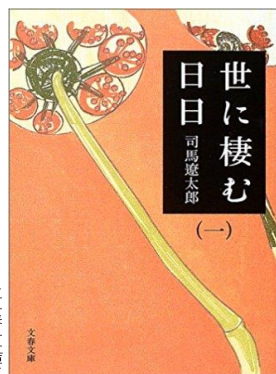




代々つづく畳職人の家に生まれた荒川さん

日本で唯一、手縫いの伝統技法「掛け縫い」のできる畳職人がいます。それは厚狭にお住いの、荒川製畳所の荒川有三さん。荒川さんはお父様の源一さんとともに、父子二代で『日本の名工』に選ばれた畳工です。

—— 私の生まれは代々つづく畳職人の家です。明治初年ごろ兵庫県ではじめた荒川畳店は祖父の代に浅草に移り、東京大空襲で焼け出されたのち、昭和16年、父の代に厚狭に移転してきます。ここに軍の指定工場があったからです。昭和25年、畳材料の統制が終わった年に私は生まれました。若いころは本もよく読みました。司馬遼太郎の歴史物が好きで、愛読書は高杉晋作の出てくる『世に棲む日々』です。あと、洋物ではジュール・ヴェルヌの『海底二万哩』も好きな一冊です。



(一)
文春文庫

◀『世に棲む日々』／司馬遼太郎 著

日本で唯一の伝統技法を受け継ぐ畳職人

三代目の父・源一が昭和50年代に、私が平成25年に、“掛け縫い”の技法で畳を編む唯一の職人として「現代の名工」に選ばれました。“掛け縫い”は畳床の最高峰ですが、それだけに文化財保護のための修復以外に需要がなく、気が付けばその技法を持つ職人は私一人になっていました。これではいけないと、毎年正月に全国から職人有志をまねき、製造技法を伝授しています。

畳職人は確実に減っていますが、手縫いで畳を作る職人はなおさらです。桂離宮の昭和の大修理のとき、畳替えがあり、新畳が機械縫いだったにもかかわらず、掛け縫いの13通りで入れ変えたと報道され、記録にも残りました。このような誤りがあったてはならないと奮起したのが、継承を決意したきっかけでした。



▲荒川さんの技術を継承する甥っ子の高橋裕一郎さん

ひと口に掛け縫いといっても、職人それぞれの個性が出ます。あるとき、三菱の岩崎邸を訪ねたおりに、父の話を思い出し、お願いして畳をはぐらせてもらいました。畳裏にはまぎれもなく、祖父の手がありました。私は祖父の仕事を見てもいません。でもそこに、父から聞いた祖父の仕事の跡がはっきりあるのを目にして、胸が熱くなったのを覚えています。

腕のある職人が安心して暮らせる社会を願って

文化が廃るということは、それを継承する仕事や材料や道具が、その道具を作る伝統がなくなるということです。一口に文化財保護と言いますが、そのためには行政から補助金をいただいても意味がありません。それよりも、「掛け縫いでやれ」とか「備後表にしろ」とかと指定してほしいです。そうすれば職人は残ります。技術は残ります。腕のある職人が安心して暮らせる社会になればと願っています。

ご多忙な畳作りの合間を縫って、お話しを伺いました。作業所には荒川さんの技術を継承する、甥の高橋裕一郎さんの姿もありました。さいしょはぎごちなかった取材でしたが、慣れてくるうちに打ち解けて多くのことをお話いただき、取って置きの思い出話も問わず語りにお聴かせくださいました。

(文・写真/香川真澄)



▲荒川さんと備後表(びんごおもて)